

東京地学協会第9回海外巡検 「インド洋からビクトリア湖まで、リフトバレー横断の旅」報告

初めて見たリフトバレー

上 村 彩*

From the Coast of the Indian Ocean to Lake Victoria across
the African Great Rift Valley:

A Report on the 9th Overseas Excursion to Kenya
The Great Rift Valley Seen for the First Time

Aya KAMIMURA*

Key words : Rift Valley, Yatta Plateau, Kenya
キーワード : リフトバレー, ヤッタプラトー, ケニア

2005年3月1日～3月11日まで、東アフリカのケニア共和国を東から西へ横断する海外見学旅行に参加した。日本からドバイ経由でケニアの首都ナイロビ(Nairobi)に到着し、そこから国内便でケニアの東海岸、インド洋に面したモンバサ(Mombasa)という町へ着いた。そこを東端として国土を横断し、ケニアの西端であるビクトリア湖岸のキスム(Kisumu)を目指して約800kmのバス旅となった(中村巡検報告図1参照(本号))。行程には様々な興味深いものがあったが、その中でもヤッタプラトーとリフトバレーが印象的であった。

ヤッタプラトー(Yatta Plateau)は地質図(中村巡検報告図1参照(本号))で見ると蛇のように細長く、長さ200kmを超える台地である。かつては低地だった川底が、現在は一番高い土地になっている「地形の逆転」である。諏訪(2003)によると、約1200万年前の火山噴火によって川に響岩(Phonolite)溶岩が流れ固まった。その後、

周囲の山々は風化によって削られていったが、風化作用に強い響岩溶岩によって蓋をされた川底は残り、ヤッタプラトーとなった。川の形がそのまま残っているため、細長い台地となっている。ヤッタプラトーは現地三日目(3月5日)のツアボ～ナイロビ間で見学した。花崗岩の基盤の上に響岩がごろごろ乗っていた。響岩はツアボ特有の赤土に覆われていたが、割れ目部分から、1～5センチ程度の斑晶がたくさん入った濃灰色の響岩を観察することができた(図1)。

現地四～七日目(3月6～9日)にかけて、旅行の主目的であるリフトバレー(大地溝帯, Great Rift Valley)を見学した。日本に住んでいるとプレート沈み込み(収束境界)の話ばかり見聞きするので、プレートが生まれたところ(発散境界)である東アフリカまで来ることができて本当によかったと感じた。我々が訪れたのはビクトリア湖(Lake Victoria)より東の東リフトバレーである。高地は標高2500mを超えるため赤道直

* 川崎地質株式会社

* Kawasaki Geological Engineering Co., Ltd.



図 1 ヤッタプラトーの響岩 . 1 ~ 5 センチ程度の斑晶がたくさん入っている .

Fig. 1 Phonolite at Yatta Plateau. There are many phenocrysts of approximately 1.5 cm in length.



図 2 上から見たリフトバレー . 左端中央に断層崖 . ナイロビ ~ ナクル間で撮影 .

Fig. 2 The Rift Valley viewed from the uplands between Nairobi and Nakuru. Left center is a fault scarp.

下とは思えない涼しさに、現地の人たちは毛糸のセーターを着て、赤や青のカラフルな毛布や毛皮の帽子を販売していた。リフトバレーの底でも標高 1700 m 以上あり、高原である首都ナイロビ（標高約 1600 m）よりも高い。初めて見たリフトバレーは予想をはるかに上回る大きさであった。私は「バレー」という単語から「谷 (valley)」のような感覚でいたが、日本語の大地溝帯という



図 3 ナクル湖国立公園の展望台からナクル湖を望む . 右手前に断層崖 .

Fig. 3 Lake Nakuru viewed from an observatory in Lake Nakuru National Park. At right side is a fault scarp.

表現のほうが実感に近かった。ただし「溝」の幅が数十 ~ 百 km に及ぶので、溝の一端に立って反対側の端を望んでも、低地を挟んでるか遠くにかすんで見えるだけで、目の前にあるのはひとつの断層崖のみである (図 2)。

リフトバレーの底には湖が点々と存在している。現地五日目 (3 月 7 日) に、そのうちのひとつであるナクル湖 (Lake Nakuru) を訪れた。ナクル湖はナイロビから北西へ約 150 km のところにあるソーダ湖である。様々な野生動物がいたが、湖上にフラミンゴがぎっしりひしめいていて、一面ピンク色だったのが印象的である。図 3 はナクル湖国立公園の展望台から湖を見下ろしたところで、右手前に写っている崖もまたリフトの断層崖のひとつである。ナクル湖のあとにメネンガイ・クレーター (Menengai Crater) を訪れた。地溝帯の底にある火山性クレーターだ (図 4)。



図 4 メネンガイ・クレーターを見下ろす。

Fig. 4 Menengai crater viewed from the uplands.

現地の方がクレーターの底で拾ってきたという気泡のたくさん入った溶岩や黒曜岩を見せてくれた。まだ真新しい感じのする溶岩で、リフト活動が現在進行形であることが感じられた。

現地六日目（3月8日）にキスムの町で旅の西端であるビクトリア湖を見学し、また首都ナイロビへ向けて東へ戻る旅となった。ここで再びリフトバレーを横切ることとなる。翌七日目（3月9日）に、ナイバシャ湖（Lake Naivasha）の近くでリフトバレーの底から断層崖を見上げる機会があった（図5）。この日は地震によって開いた割れ目を見たり、このような崖を間近で見たりして、リフトバレーが伸張応力場であることを実感する日となった。そしてナイロビへ着いた我々はホテルで巡検の復習勉強会を開き、日本へ帰国した。



図 5 下から見上げるリフトバレーの断層崖。

Fig. 5 A fault scarp of the Rift Valley viewed from the bottom.

謝 辞

今回の海外見学旅行の案内人を務めてくださった東京都立大学（現・首都大学東京）の堀 信行先生と早稲田大学の久保純子先生には、学術的なところから事務的なところまで面倒を見ていただき、たいへん感謝します。

文 献

諏訪兼位（2003）アフリカ大陸から地球がわかる．岩波ジュニア新書，200p．